（別紙　２）

審査の結果の要旨

氏名　　分部　利紘

本論文は、エピソード記憶（自分が体験した出来事に関する記憶）の想起過程について、従来の定説では説明のつかない事実が存在することを実験的に立証し、その事実を説明するための新たな理論的枠組みを提案したものであり、全４章から構成されている。

第１章では想起のための検索の過程に関する先行研究を概観し、１）検索は手がかりとの連合に基づいて行われ、手がかりと連合していない記憶（非連合記憶）は活性化されないという共通理解、および、２）その実証的裏付けの脆弱性を指摘した。更に、非連合記憶の活性化による検索過程には連合以外の原理が関与しているという仮説の検証を本論文の目的として設定した。

第２章では、想起の対象（ターゲット）を検索した後に非連合記憶を検索するという新たに考案された実験手続きにより、１）ターゲットを検索する時点で既に活性値が高い記憶は、非連合記憶であっても活性化されること、２）非連合記憶の活性化は検索すべきターゲットが近時記憶（形成から数年しか経過していない記憶）の場合に限られることを明らかにした。

第３章ではターゲットを検索する際に他の記憶（フォイル）を強制的に活性化させるという実験手続きにより、１）非連合記憶は活性化されても想起される（意識にのぼる）までには至らず、ターゲットの想起を妨害しないこと、２）連合記憶は活性化されると想起にまで至り、ターゲットの想起を妨害することを示した。

第４章では、第２章と第３章で得られた実験結果および先行研究の知見を総合し、エピソード記憶の活性化から想起に至るまでの検索過程に関して新たな理論的枠組みを提案した。

本論文で報告された実験はいずれも緻密に立案されており、エピソード記憶の検索過程に関する従来の標準理論を覆す知見をいくつも報告している。また、それらの知見と従来の知見とを統合的に説明するために、記憶の検索過程に関する新たな理論的枠組みをも提案している。その証明にはさらなる検討が必要な点もあるが、エピソード記憶の検索過程について重要な知見を提供する研究であることは疑いない。以上の点から、本審査委員会は、本論文が博士（心理学）の学位に値するとの結論に達した。